昭和57年(1982年)4月10日　教皇様の声　毎月10日発行　第24号

4　APRIL, 1982

教皇様の声

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済
©1982 精道教育促進協会 ☎(芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12—6

若者へのメッセージ

勇気をもって主に続きなさい

心のねうち

あなた方のねうちはまた、「あなた方の心」のねうちでもあります。人間の歴史は、愛することと愛されることとの歴史でありました。

心についても、霊魂の問題と同じく、正確に見きわめるべきだと思います。心というものは、人間がそれをどのように用いるにしても、愛と友情の象徴であり、規則、つまり倫理に従っています。調和のとれた人格形成に心の要素を考慮すると言っても、感傷的になれと言うのではありません。心は、人々に自分を開いて人々の気持ちをくみ、理解する能力であります。感性とは、それが真実の、深いものであれば傷つきやすいものです。そこでやけになって、自分の中に閉じこもってしまいたいという誘惑に駆られる人もいるのです。

ですから、愛するということは、そもそも他人に自分をささげることなのです。愛は、本能の傾きであるどころか、人々に向かっていくという、意志の意識的な決定なのです。真実に「愛する」には、あらゆる物を、とりわけ自分自身を捨て去ることが、必要です。無償で与え、限りなく愛さなければならないのです。この自己放棄こそ調和のとれた人格を養い、幸福になるための秘訣なのです。

みなさん、もっとしばしば、キリストに目を向けなさい。キリストこそ、報酬を求めず、最もよく自覚し、意識的に愛したひとです。キリストの言葉を黙想しなさい。「愛する者のために、生命を与える以上の愛はない。」人である神、心を刺された人をよくごらんなさい。おそれることはありません。イエズスは愛を裁くためではなく、愛をその間違いと偽りから解き放つために来られたのです。

心と愛について、私はもう一つ、打ち明けたいことがあります。みなさんの多くが、与えられた賜すべてをキリストと兄弟のために、愛の力をふりしぼりながら大胆に捧げることができるということを、私は心の底から信じています。

神への道

肉体と霊魂、そして心の価値について語ってきました。(『教皇様の声』三月号) しかし、それと同時にもう一つ非常に大切な一面にも時折ふれてきました。それなしでは人間が自分自身の、もしくは他人のとりこになってしまうという大切な一面、つまり、「神に向かって開かれていなければならない」ということです。

キリストが人間性を自由にし、高められたということは、つまり、御父と御子と聖霊との、ある意味での縁つづきにしてくださった、ということなのです。(今朝私たちは、三位一体を祝いましたが)、ここにこそ、知らず知らずのうちにも、あらゆる人が心であこがれている真実の道、キリストがお与えになった神への道が開かれているのです。その神とは、ペルソナとしての神であって、哲学者の神ではなく、聖書に啓示された神、アブラハムの神、イエズス・キリストの神、人類史の中心にいます神です。あなた方の身体と霊魂と心の能力をしっかりと把握して、充分な実りを与えるようにしてくださる神なのです。一言でいうならば、みなさんの存在そのものを、今から、そして死後もずっと、キリストのうちに新たにしてくださる神であります。

これこそ、私の信仰、初代教会から続く教会の信仰であります。それのみが、使徒らの証言を基としてたち、いろいろな危険にもめげず、人間を救う信仰なのです。大勢の人々がこうした体験をお持ちであると確信しています。その人たちにとっては、私の訪問が刺戟(しげき)となって、信仰を深めることができますように。そのために教会はあらゆる手段を提供しています。

この信仰に組することをためらっている人もいるでしょう。多くの人は、求道中だと言います。無信心で通す人、信仰を持つことなどできないと思う人、信仰などに関心のない人、またちゃんとした神の姿を教えられず、心をひらくことのできない人もいるでしょう。宗教をかつがれた人、疎外された人のものであるとする、似非(えせ)哲学の網に引っかかって、神なしのヒューマニズムを築こうと考えている人々もいます。そういう人々すべてに向かって、お願いします。どうか、心の窓を神に向かって開いておいてください。

キリストとはどういうお方?

あなた方の質問の中心は、イエズス・キリストについてです。キリストについて私が話すのを望み、私にとってイエズス・キリストとは誰なのかと問いかけています。

あなた方に同じ質問を問い返させてください。あなた方にとって、イエズス・キリストとはどんなお方ですか。みなさんにも逃げずに質問にこたえてもらいたいと思います。私は、私にとってのキリストについてお話し、返答にかえたいと思います。

福音書全体が、人間との会話です。色々の世代との、国家との、諸々の伝統との対話でありますが、それはいつでも、一人ひとりとの個人的な対話なのです。

同時に、福音書には数多くの会話があります。なかでも、キリストと金持の若者との対話はとりわけ意味深いと思います。(マテオ19章をお読みください。)

どうしてキリストはこの若者と話すのか、その答えは福音書にあります。また、みなさんはどうして私が、どこへ行っても若者たちと逢いたがるのか、尋ねています。(最初の質問です。)

答えましょう。〈若者〉は、特に決定的な〈自己形成〉期にいるからです。とはいえ、別に人間の形成は人生の一時期だけであると言うつもりはありません。「教育は人が生まれる前から始まり」、最後の一日まで続きます。しかし、青年期は形成という見地からして特に重要、かつ決定的に意義深い時期です。キリストとあの金持の若者との対話についてよく考えてくだされば、今申しあげた理由がお

わかりになることでしょう。

若者の〈問いかけ〉は核心をつくものであり、それに対する答えもまたそうです。

二人の話し合いは、その若者にとってのみ本質的なのでも、当時の状況の中でのみ大事な意味を持っていたのでもなく、現代でも同様に、根本的に重要なことです。ですから、福音書が現代人の諸問題に解答を与え得るかという質問に対しては、〈第九番目の質問〉〈福音書には解答を与える力があるばかりではない。福音書のみが完全な答え、物事の本質をとらえた答えを与える〉と答えます。

キリストはみ言葉です。つきることのない対話の〈み言葉〉です。キリストはあらゆる人々との〈対話〉なのです。たとえ、キリストに注意を払わない人々がいたとしても、どのように話を進めるのかを知らない人がいても、あるいはその対話をはっきりとはねつける人がいても、いずれにしろ、キリストは、対話なのです。遠ざかっていく人がいます。しかし、そのような人々との話し合いも始まります。そして、思いもよらぬとき不意に〈ベールをとって〉現われるのです。

キリスト者の召命

キリストとあの若者との対話には、先に述べたように、二つの段階があります。第一は、十戒に関すること、つまり人間の倫理全体の底にある根本的なさだめについてです。第二段階についてキリストはこうおっしゃいます。「あなたがもし完全になりたいなら、…私について来なさい。」(マテオ19・21)

このエピソードの中核、頂点となるのは「私について来なさい」ということばです。この言葉からわかるように、キリスト教とは、多種多様な教えの集合ではなく、生きておられるペルソナ、イエズス・キリストとの関わりを要求するものです。イエズス・キリストは案内者であり、模範です。色々な方法、色々な態度の習い方があります。色々な方法と程度に応じて、キリストを人生の〈規範〉とすることができるのです。

私たち一人ひとりは下地のようなもので、キリストに従いつつ、全く独自の具体的な人生の形を作りあげることができます。それは、キリスト者の召命と呼べるものです。(…)

危険を承知で従う

神のない世界は、遅かれ早かれ人間に敵対します。社会的、文化的に大きな影響や、ひんぱんに起こる出来事によって信仰への道が妨げられたり、キリストから遠ざかるはめにおちいることも確かにあります。しかし、そのような困難のさ中にあっても、あなた方の国のような信教の自由を享受する国では、望みさえすれば障害を取り除き、神の恩恵の助けをうけて信仰を得ることはできるのです。みなさんにはそのための手段がととのっています。それらを本当に使っていますか。みなさんに対する愛にかけて、私は次のようにうながしたい。「心の扉をキリストに向けて一杯に開けなさい」と。何をおそれるのですか。主を信頼してください。危険を冒しても勇気をもって主に続きなさい。そのためには、当然のことながら、自分自身、自己流の考え方、偽りの慎重さ、無関心、自己満足、さらに、これまでに身についた非キリスト教的な習慣から抜けださなくてはなりません。そう、キリストに従うには、放棄と回心とが必要ですから、まず、そうしようと望む勇気を持たねばなりません。祈りの中でそれを願い、実行に移し始めるのです。キリストがあなた方の道となり、真実となり、人生そのものとなりますように。キリストがあなた方の救い、幸福となりますように。キリストが、あなた方の全生活をみたし、生活のあらゆる面、つまりあらゆる関係、活動、感情、思考において、つねにキリストと共に動き、主と一つになるよう、言ってみれば、〈キリスト化〉されるように全てを主に委ねなさい。みなさん方が、キリストと共に、みずからの存在のもととして、目的としての神を認めることができるよう心からお祈りします。

(一九八〇・六・一　フランス)

召し出しと家庭の役割

1　「われは主のはしためなり」(ルカ1・38)(…)今日は福音史家聖ルカがえがくマリアの姿を黙想したいと思います。過去、数多くの画家たちが自分の解釈に合わせてこのお告げの場面をえがいてきましたが、それぞれの表現の仕方は実に多様でありました。ところで、細部や描写の仕方はさまざまではあるにもかかわらず、大天使を目前にする聖母の姿、マリアの注意深い聴きとり方、さらに聖母の返答という点では例外なくあらゆる画家が意見を同じくしているのです。「われは主のはしためなり。おおせのごとくわれになれかし。」

2　お告げこそ聖マリアが召しだしを受けたときでありました。ご降誕が実現するかいなかはこの瞬間にかかっていました。みなさん、この場面をよく考えると、たくさんの教えをひきだすことができるのではありませんか。召しだしについて考えるには、まことにぴったりとした場面です。

大勢の人々のおしみない心のおかげで、続いてこんにち迄も、人々の心にイエズスをもたらすこと、つまり救いを与える信仰へ人々を導くことができるのです。ただしそのためには一つの条件をみたさなければなりません。つまり、「なれかし」のことばを幾度も繰り返し、いわばみなさんがその場面をそれぞれ再現しなければならないのです。そうすれば、つねにイエズスをみつけ、主を礼拝し、キリストの光を導きとすることができるのです。ちょうど、貧しい羊飼たち、それに賢人たちが主の光に導かれたように。

召しだしとは提案、まねき、もしくは、救い主をとみに必要とする世界に救い主をもたらすことなのです。召しだしを拒むということは、主のおことばを拒絶するだけではなく、大勢の人々が心に抱く高尚な望みを、無意味にしたり空しくしてしまうことになります。しかし、自力で高貴な望みに応えられないのです。

本日私たちは、聖マリアが神のよびかけに応えてくださったことに感謝します。聖母の即断が救いのはじめになったからです。同じく、大勢の人々はあなたに感謝の意を表し、称えます。あなたは、主の呼びかけに応えて人々に恩寵の福音(使徒行録20・24参照)をもたらし、聖パウロが書くように、私たちの「よろこびに力を貸して」(コリント後1・24)くださったからです。

3　召しだしを完成させるにはどうしても家族の貢献が必要となります。現代社会におけるキリスト教家庭の役割についての文書において、「家族こそ、神の国のために働く召しだしの第一にして最上の苗床である。」(『ファミリアリス・コンソルツィオ』53)と書きました。事実、「キリスト者である夫婦や両親の働きは本質的に教会的な働き」なのです。「福音化される共同体であると同時に、福音化の主体となる共同体としての教会全体のなかで、」(同右)家庭は固有な役割をになっているのです。

お父さんお母さん方、私は切にお願いいた

説教・講話・書簡等の抄訳

します。みなさん方も、教会の諸問題をもっと身近かに感じとり、自分の問題として対処してください。子供さんたちにも、このようなみなさん方の心を、祈りと神のみことばの朗読、よい模範によって、伝えていただきたいのです。召しだしが生まれ、よく育ち、完成するのは、健康で責任あるキリスト者の家庭であります。召しだしがしっかりと根をおろし、どんどん成長して実り多くたくましい樹になるのは、まぎれもなく家庭においてなのです。もちろん、神学校と協力して、候補者が司祭職に至るまで、教育と形成を細やかな心づかいで続けなければなりません。言うまでもなく、神学校はユニークで大切な役割をもっています。しかし、とにかく、すべてが家庭に始まり、すべては家庭の制限を受けることもたしかなのです。

そこで、みなさん方にもぜひ、「おおせのごとくわれになれかし」と答えて、みなさん方の愛の実りを捧げて頂きたいと思うのです。

4　大天使は聖母に言いました。「聖霊があなたに下り、いと高きもののかげがあなたをおおうのです。」(ルカ1・35)私はみなさん方を神の御力にゆだねます。「神にはおできにならないことはないからです。」(ルカ1・37)神の恩寵があれば、「偉大なこと」ができるのです。御母聖マリアが「マニヒカット」でうたわれたように。(ルカ1・49参照)(一九八一・十二)

主なる神を愛せよ、隣人を愛せよ。

―道徳の基礎―

道徳法

「……こまらせたり、しいたげたりしてはならない……」「やもめや、みなし子を、悲しませるな。」「あなたは、金貸しのようにふるまわず……」「……質にとったなら……それを返せ。」出エジプト記の著者は、神の代願者として、このように旧約の人々に呼びかけています。このように、断固とした命令を与える出エジプト記の著者は、知恵の働きと強い意志を備える人間の、心の奥に刻み込まれている自然法についてよく考えよ、とうながしているのです。神は、人間を偶然に創られたのではありません。神は愛と救いのご計画によって人間をお創りになられたのです。人間は生命ある存在、意識ある存在ですから、わがままや自己本位、本能や情念のおもむくままに動かされてはなりません。残念なことに、情報機関、とくに、テレビなどは、「本能に支配される人道主義」を教え、広め、それによって、本能のおもむくままに行動することや、快楽主義、攻撃的であること、などを称揚しています。

もちろん、このような考えは間違いです。人間の良心には、道徳法が刻みつけられているので、創造主と隣人、それに、自己の尊厳を尊重できるはずです。そして、それは「十戒」という形に表わすことができます。

自然の道徳法を犯せば恐ろしい結果を招きます。すでに、聖パウロはローマ人にあてて次のように述べています。「悪を行なって生きる者にはすべて……患難と苦悶があり……善を行なう者にはすべて……光栄と名誉と平和とがある。」(ローマ2・9～10)聖パウロの時代の異教徒たちは、唯一の神、創造主を知らず、従って神に従わない人々、つまり自然法にも従わない人々のことですが、この異教徒たちに言った聖パウロのことばは、時代のへだたりを感じさせることなく、現代についても見事にあてはまります。「また彼らは、深く神を知ろうとしなかったので、神は、彼らのよこしまな心のままに、不当なことをおこなうにまかせられた。彼らはすべての不正、罪悪、私通、むさぼり、悪意にみちるもの……である。」(ローマ1・28～29)人の心に刻み込まれた神法に不従順であれば、社会生活と私生活における道徳の低下を呼び、ひいては、人類全体にとっても最も恐ろしい脅威となります。

回勅『レールム・ノヴァルム』が出された頃、すでに悲劇的な状態にあり、九十年後の今もなお続く道徳の腐敗は、人類にとって、最大の脅威となっています。

道徳のもとい

ある律法学士がイエズスに「律法のうち、どの掟がいちばん大切ですか」(マテオ22・36)とたずねました。「あなたは、すべての心、すべての霊、すべての知恵をあげて、主なる神を愛せよ。これが第一の、最大の掟である。第二のも、これと似ている、隣人を自分と同じように愛せよ。全律法と預言者とは、この二つの掟による。」(マテオ22・27～40)とイエズスはお答えになりました。

これらのことばで、キリストは、道徳の基礎、つまり、道徳という建物の土台をお示しになります。この二つの掟に、人間の道徳が由来するとおおせになったわけです。もしあなたが、何ものにもまして神を愛するなら、また隣人を自分と同じように愛するなら、――そうしたなら当然、「だれでも困らせたりしいたげたり」しないでしょうし、とくに、「やもめやみなし子」を「悲しませ」ることもなく、「金貸しのようにふるまうこともなく」「質にとったものを返」すことでしょう。(出エジプト22・20～25)

きょうのみことばの朗読によれば、人間の道徳という建物がそもそもどのような土台の上に建てられているかを知ることができます。と同時に、私たちもこのやり方で、土台から築いてゆくべきことを勧められているのです。すべての人々、そして一人ひとりが同じような仕方でこの建物を築いてゆかなければなりません。自覚の上に行動をする人のうちに、そして家族内でも、また社会全体の中にも、人間の道徳という建物を右に述べた土台の上に築かなければならないのです。

きょうの朗読から有益な教えを得るために、道徳の建物を築くとすれば、どのように築いてゆけばよいかを考えなければなりません。私たちの行ないをふりかえってみて万一良心がうずくなら、その建物には愛徳という土台が欠けているのではないか、調べてみる必要があります。(…)

「主は私の岩、私のとりで、私ののがれ場。私の神、私の大岩、私はそこに身をさける。私の盾、私の救いの角、私の城。」(詩篇17(18)・3)

人は、一生のあいだ色々なときに、神に助けを乞い願います。たとえば、右の詩篇にあったように。困難なときや、危険なときに、神さまに助けを求めるものなのです。

なかでも恐ろしい危険は、個人にとっても、家庭、あるいは社会全体にとっても、道徳に関するものでしょう。

それゆえ、道徳という建物を建てるためにはどうしても、固い岩を土台にすべくもっと努力をかたむけ、より熱心に、神に協力しなければなりません。こういう土台ならいつまでもしっかりとしています。神は、心から望むものに、恩恵をこばまれることなどありませんから。(……)キリストの恩寵を心から望みなさい。

はじめに、申しあげた聖書のことばが、みなさんのうちに実現されますように。「主よ、私の力よ、私はあなたを愛する。主は、私の岩、私のとりで、私ののがれ場。」(詩篇17(18)・2)

(一九八一・十・二十五)

不変の教え

信仰教育を大切に

（…）使徒職面での、カテケージスと信徒の養成、信徒激励がとみに必要であるということは、とりもなおさず司祭、修道者としての召し出しをうける人がどんどんでてこなければならないということを示しています。みなさん方がこの問題についてよく考え、解決策を求めて尽力しておられることはよく承知しておりますが、この分野では、労を惜しむことのないよう重ねてお願いしたいと思います。この意向を、司祭や修道者の方々に徹底させてください。彼らがよい種を寛大にまき、かり入れの主にかり入れのための新しい働き人をお送りくださるように願うよう勧めてほしいのです。召し出しは教会にとって死活の問題でありますから、何はさておき優先させねばなりません。

教会が若者たちを招く上で様々な困難が伴うことはみのがせません。しかしながらその困難が、あなた方の熱意とイニシアティブを麻痺させることがあってはなりません。現代の若者もまた、困難な状況に対し、偉大な理想に対して、心を魅かれています。若者たちの間には必ず、尽きることのない寛大な態度が生まれます。ところで、若者たちはやり甲斐のある理想を目指して戦いを挑みたいのであって、自分自身さえも見失ってしまいそうな格下げされた理想に向かうのではありません。

これと同じ理由から、司祭職は犠牲や放棄の多くを求めないとか、あるいは、司祭が独身の義務から解放されれば、あたかも忠実なキリスト信者の数を増すことができる、というふうに考えて自分自身を欺くようなことがあってはなりません。（Optatum totius n. 2とリオデジャネイロでの説教参照）

こうした目標が達成できるように、あなた方の神学校を細心の注意をもって見守り、実際にそこでは目標が達せられるように尽力してください。司祭たちが、真の忠誠と喜びに満ちた献身の精神で、自己の理想と使命を生きぬくことができるように、いつも助けてやってください。キリストと福音のために一生をささげる召命が多くでるように、この面で重大な責任を負うキリスト信者の家庭を見守ってやってください。聴罪司祭と霊的指導者らが、神のみ声にいつも注意を傾けているように導いてください。神は、お望みのときにお望みのやり方で、お望みになるすべての年代の人々をお呼びになります。（一九七九年十月四日、フィラデルフィアでの説教と一九七八年七月十二日、リオデジャネイロでの説教参照）

仕事のなかでもとりわけ農業と漁業に関連した仕事の尊厳をたかめるように、さらに尽力していただきたい。移住する家族に近付き、彼らが新しい生活環境にほどよく適応できるように、不断から家族や仲間たちによい形成を与えておきなさい。移住する家族が追い立てられたという感じを受けないように、迎える側の司牧者たちと接触を保ってください。これはとても大事な分野で、みなさん方の司牧的熱意をもってすれば、実に多様なイニシアティブが生まれることでしょう。

（スペイン、コンポルテラ大司教区の司教様方に　一九八一・十二・十四）

主よお留まりください

〔一九八一年十二月二日、教皇さまは、聖ペトロ大聖堂内のご聖体の聖堂でごミサをおたてになり、ご聖体の永久礼拝の初日を祝われた。ミサ後の聖体賛美につづいて、教皇さまは次のお祈りをお読みになった。〕

御身はすべてをご存知です

1　「主よ、私たちのもとにおとどまりください。」これは、エマウスの弟子たちが始めて口にしたことばです。そののち、何世紀にもわたって、御身の弟子と証聖者たちが繰り返してきました。

ローマ司教として、また聖ペトロの殉教地の上に立つ聖堂の第一の奉仕者として、私はここに同じことばを口にしたいと思います。

主よ、私は人々に語りかけ、御身がこの聖堂でご聖体永久礼拝を受けいれてくださるよう、祈れと申します。

今から日々、私の望みにこたえて常に私たちのもとにおとどまりください。私は世界中のあらゆるところから届いた願い、とくに聖座の住人の望みにこたえて御身にお願いいたします。

おとどまりください。この大聖堂を訪れる人々は礼拝と感謝、つぐないと願いの祈りに時をすごしますが、その祈りのうちに、御身に出会うことのできますように。

信仰の奥義、ご聖体のもとにおかくれになっていると同時に、パンとぶどう酒の外観のもとにご自分をおあらわしになる御方、どうか、私たちのもとにおとどまりください。

御身がつねにこの大聖堂に現存なさることを確認できるように、どうかおとどまりください。ここを訪れる人々に、この大聖堂は御身のおすまいであることを気づかせることのできますように。この大聖堂がご聖体のみ心から流れ出る生命であり、聖性のみなもとであることに、人々が気づくことのできますように。

2　このご聖体の永久礼拝を、主の年一九八一年、教会にとって大切な数多くの記念が祝われた年の待降節に始めます。

主よ、すべてのできごとは御身の降臨と再臨との間に起こっているのです。ご聖体は御身の初の来臨を秘跡のかたちで証明してくれます。また、この秘跡をもって、預言者たちのことばが実現し、人々の希望がみたされました。主よ、御身はパンとぶどう酒の外観のもとに御身の御体と御血をお残しくださいました。そのおかげで、世界があがなわれたことは明らかになり、御身の過ぎ越しの秘義が生命と救いの秘跡として全人類にもたらされたのです。ご聖体は、御身の再臨を告げ知らせると共に、最終的な待降節（あらわれ）であり、全教会の待ち望むしるしでもあります。

主イエズスよ、私たちはこのパンを食し、ぶどう酒を飲んで、御身の死を告げ知らせます、御身が栄光のうちに来られるまで。

毎日、毎瞬間、パンとぶどう酒の外観のもとにおいでになる御身を礼拝し、「栄光へのお召し」（ペトロ前5・10）を待ち望む心をあらたにしたいと思います。御身が栄光に輝く御体で「御父の右」におすわりになったときに始まった、その栄光への召しだしへの希望をあらたにしたいのです。

3　ある日御身はペトロにおたずねになりました。「おまえは私を愛しているか。」

御身は同じ問を三度なげかけられました。ペトロはその度に、「主よ、御身はすべてをご存知です。私が御身をお愛ししていることはよくご存知です」と答えたのです。（ヨハネ21・15～17）

この大聖堂の礎となる墓の主ペトロ、そのペトロの答えが、本日始まり日毎つづけられる礼拝においてくりかえされますように。

ローマの聖座をペトロの後継者として継ぐこの私と、御身の秘跡的現存を礼拝せんと集うすべての人々が、御身を訪れる毎に、使徒聖ペトロのことばに含まれる真理を証し、またなりひびかせることのできますように。

「主よ、御身はすべてをご存知です。私が御身をお愛ししていることはよくご存知です。」

『教皇様の声』　ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙　■毎月　十日発行　■定価　一部六十円送料六十円　■一年予約七百二十円送料七百二十円　■二十部以上の一括購入なら送料不要

郵便振替　神戸　3-72393